

全国有数のブドウ産地

二地域居住しての週末農業は、30年を超えた。家内の実家が長野県伊那市につき東京との中間で、いつでもどちらにも行けるのが決め手になって、山梨県の牧丘町（現山梨市牧丘町）にある竹藪400坪を購入して開墾したものだ。

牧丘町は甲府盆地の最も東京寄り、秩父連山から雁坂トンネルを超えて甲府盆地の北斜面を下る途中にあり、盆地を挟んで富士山を南に遠望する。日照に恵まれ、一日の気温差も大きいことから果樹栽培の適地とされる。牧丘町はブドウ「巨峰」の全国一の産地として知られたが、近年は「マスカット」が急増し過半を超える。

意図せずに進行する規模拡大

牧丘に通い始めた頃、ブドウ農家は40代、50代の担い手もけっこういたが、現在では高齢化が著しい。同じくブドウの産地として知られる甲州市勝沼町では、新規就農を希望する若者が多く、農地や家

屋がなかなか手に入らないという話を耳にする。これは交通の便の良さや、大手ワインメーカーの工場があるなど、勝沼が持つ好条件によるところが大きく、むしろ勝沼は例外で、周辺の産地は総じて担い手不足が深刻だ。

ウ畑を耕作放棄するのは申し訳ないとして、無理して引き受けている者が多い。このため畑はよく整理されているとはいえず、畑周辺の草刈り等までは手が回らず、荒れた景観が目立つ。

このように残った生産者によるブ

時流を読む

外国人労働者への 依存度を高める ブドウ生産

農的デザイン研究所代表 薦谷 栄一

ブドウも稲作同様、後継者不足から離農するにあたっては、近隣でまだ生産を続けているブドウ農家にブドウ畑を預けて生産してもらうものが多い。数字上は生産者が減って規模拡大はすすんでいるが、一大産地として整備を重ねてきたブドウ

畑の集約化は、団塊の世代のリアルタイムも含めて、もはや限界に差し掛かってきている感がある。

急速な外国人労働力へのシフト

そうした中、筆者の畑近くにある元商店の建物を作業場にしてブ

ドウを生産・出荷しているKさんは、とにかく農地は守りたいとして、売りに出た畑や家屋敷は極力購入して、生産維持に努めている。そのKさんは団塊の世代で、膝が痛いと言を引きずりながら、畑や作業場等をバイクで走り回る。

Kさんは少し前までは学生や若者を労働力として活用してきたが、この1、2年は外国人労働者をメインに転換してきており、今はベトナム人が主だ。とにかくよく働く、ということと彼らへの評価は高い。ブドウ等果樹の仕事は季節性が大きい、農閑期には家屋敷の改修作業や、竹藪処理等地域の困りごとを引き受けての作業で、周年労働を可能にしている一方、彼らは日本の大工技術を習得し、地域貢献にも活躍するなど、地域での存在感を増している。

団塊の世代のリタイアは既に進行し本格化しつつある。この先、外国人主体で経営継続を可能にしていくのか、それとも廃園が進行するのか、状況は待ったなしだ。